企業名：　住友林業

レポート名：　「統合報告書 2023」

1.　この会社が目指している将来の姿が理解できるか

住友林業株式会社の「統合報告書 2023」（以下、報告書）では、同社の目指している将来の姿が非常に体系的に説明されており、理解しやすいと思った。

同社は、2022 年 2 月に長期ビジョン「Misson TREEING 2030」を発表しており、それの実現に向けて 2022 年 12 月期から中期経営計画「Mission TREEING 2030 Phase 1」を開始している。「Mission TREEING 2030」は、社長の光吉敏郎氏からのメッセージのなかで、「森と木の価値を活かし、地球環境、人々の暮らしや社会、市場や経済活動に価値を提供することで、将来世代を含むあらゆる人々やすべての生き物に、地球が快適な住まいとして受け継がれることを目指す長期ビジョン」として紹介されている。その後の 14～15 ページでは、「Misson TREEING 2030」がより具体的に説明されており、16～21 ページにかけては、住友林業の 3 主要分野である「森林」、「木材」、「建築」の各分野の長期的な目標とそれの達成に向けて行われている活動が紹介されている。また、長期ビジョンの達成に向けた中期経営計画の「Mission TREEING 2030 Phase 1」は、34～41 ページにかけて非常に詳しく説明されている。

以上のように系統的に長期的なビジョンが説明されており、内容が掴み取りやすかった。

2.　この会社の現在の競争優位性が理解できるか

同社の事業ごとに競争優位性を見てゆく。

木材建材事業の競争優位性としては、同社が長年かけて形成したグローバルネットワークを用いた木材の調達力、木材活用によるカーボンニュートラル社会の実現への貢献などがある。

住宅事業の競争優位性としては、国内で変化する消費者ニーズに合った住宅の提供、長年を経て形成された同社のブランド力などがある。

海外住宅・建築・不動産事業の競争優位性としては、同社の有するグローバルなネットワーク、事業を展開している地域に根差した事業運営を行う数々の事業パートナーなどがある。

資源環境事業の競争優位性としては、同社が長い歩みを通して培ってきた森林経営に関する様々なノウハウ、開発してきた技術などがある。

生活サービス事業の競争優位性としては、日本社会の高齢化に伴い変化するニーズに対応した住まいや暮らしの提供、介護事業や宿泊事業を中心としたサービスの展開を可能にするノウハウなどがある。

各事業の作り出している価値、各事業の強みが報告書の「事業ポートフォリオと戦略」のところで詳しく説明されており、同社の現在の競争優位性は理解しやすかった。

3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

同社の競争優位性には持続性があると感じた。

同社は、今後も拡大してゆくと考えられる需要を獲得しに行っている。国産木材、環境を配慮した建築、国内における介護事業や宿泊事業、などは今後もますます重要になってゆくと考えられ、それを先読みして同社は事業構想を構築しているため、同社の競争優位性には持続性があると思った。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

住友林業に就職したら、自身の人的資本の価値向上を達成できると思った。

同社は、木材建材事業では、取扱高国内 1 位であって日本国内で非常に活躍している。さらに、海外住宅・建築・不動産事業においては世界各国でグローバルに活躍している。このように、国内でもグローバルでも活躍している企業では、様々な貴重な経験ができると感じた。

さらには、職場環境の向上に関しては、社長の光吉敏郎氏からのメッセージや長期ビジョン「Mission TREEING 2030」などで触れられており、同社の職場環境に対しての配慮によい印象を受けた。

5. 報告書のよかった点はどこか、どのような改善余地があるか

まず、統合報告書の見た目が非常に良かった。色、絵、グラフ、写真などがふんだんに用いられていて美しく、読みやすかった。さらには、内容もきれいに整理されて書かれているので、その点でも読みやすかった。

一方、一部の言葉に関しては説明を加えた方がよいと思ったものもあった。例えば、「炭素固定」や「カーボンオフセット」などは、その意味を知らない人も多数いると思われるので、それらの説明を加えた方が、よりスムーズに内容を伝えることができると思った。それらの語句の意味をすぐに理解できれば、読者は同社の活動の具体的な内容だけでなく、その重要性もよりよく理解できると思った。

また、長期ビジョンの「Mission TREEING 2030」に関しては、報告書全体で主に具体的な事業構想が強調されていたが、それらの具体的な構想の源泉となっている、より抽象的なビジョンをもっと強調してもよいのではないかと思った。そちらのほうが、なぜこのような具体的な事業構想になっているのか、ということがもっとよく伝わり、ステークホルダーの人たちからの共感を受けやすくなると思った。

参考：住友林業「統合報告書 2023」 https://sfc.jp/information/ir/library/pdf/ar2023jpn.pdf